
でいあ まい わんだふるでいず！

Peta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でいあ まい わんだふるでいず！

【Nコード】

N6317B

【作者名】

P e t a

【あらすじ】

見た目女の子な男の子、柚木葵（高2）の騒がしい日常！！家族に幼馴染みに先輩にクラスメイト……葵の周りには騒がしい人達がたくさん！葵の日常コメディーです！！！！

1st Day: 朝はゆっくりしたいよね? (前書き)

でいあ まい わんだふるでいず! は短編のでいあシリーズの続編です。読まなくても分かるようにしてありますが、読んでくれたら嬉しいですm (_) m

1st Day: 朝はゆっくりしたいよね？

日本のとある場所のとある町のとある住宅街……。見た目女の子な男の子は騒がしい毎日を過ごしています。今日も、彼の騒がしい一日が始まります――…



耳元で目覚まし時計が鳴り響く……。うるさい。

「ん………」

布団を被ったままアラームを止める。眠い……。瞼を擦りながら体を起こす。

「……………」

のそのそと着替を済ませ洗面台に向かう。鏡を覗き込むと見慣れた自分の顔。まだ幼さの残る顔立ち、背中まで伸びる長い銀髪は前髪が寝癖で撥ねている。そしていまだ寝惚け眼の蒼い瞳……………自分で言うのもなんだけど、今日もすっごく可愛い。

「……………はあ。」

溜め息がでる……………何で……………

「あら、おはよう葵ちゃん。」

「……………おはよう。」

母さんがにこやかに挨拶をしてきた。

「ねえ葵ちゃん？お洋服買ってきたんだけど着てみて！」

母さんが差し出したのは可愛い女もののブラウス。

「そんなの着れないよ。」

「そうよね……………葵ちゃん、もう高校生だもんね。少し子供っぽいかしら？」

「そういう問題じゃなくて！」

そう……………問題はそこじゃない。問題は……………

「俺は男だ！！！！」

柚木葵、16歳。特徴、長い銀髪に蒼い瞳、そして可愛い顔立ち。

性別………正真正銘男である。

「!?!」

うおい!今気付いたって顔すんな、母親!!

「だいたい、『ちゃん』はやめてくれって言ってるだろ!」

「いいじゃない!可愛いんだから!」

「よくねー!?!?!」

このやりとりも何度目かわからない。この息子の悩みを全く理解していないのが俺の母親。

「あら、前髪撥ねてるわよ。」

そう言って手を伸ばす母さん。

「いいよ。自分で直すから。」

「いいからいいから!」

そう言って俺の髪をいじりだす。昔はモデルをやっていたらしく、
こういうのは放っておけないらしい。

ゆずきはるな
柚木春菜、42歳。

顔立ちは日本人だが、俺と同じで銀髪に蒼眼。そんでもって息子から見てもかなりの美人。つまり、俺の遺伝情報は9割方母さんに片寄っている。なんでも、どっかの国の人の血混じってるらしい。でも、じいさんもばあさんも黒髪だ……隔世遺伝か?ただ、前髪の癖は父さん似らしい。……こんなとこ似らんでいいのに。

「出来た!」

「ん？」

ぼーっとしているあいだに直し終わったらしい。鏡を覗いてみた。

「……母さん？」

「どうしたの？」

俺の髪は左右にゴムでくくられている……あ、ちょっと似合う……
…じゃねえ……！！

「なんでツインテールにしてんの……！！？」

「可愛いからつい♪」

「つい♪じゃねえ！」

頭のゴムに手をかける。

「あっ……！！」

声を上げる母さん。

「そんな事したら……」

「泣いても無駄だから。」

ためらいなくゴムをほどいた。……まったく、毎朝毎朝。

キッチンに向かうとパジャマ姿の父さんと妹の雪奈^{せつな}がいた。

「おはよう。」

「ああ、おはよう葵。」

「……おはよ。」

爽やかに挨拶を返す父さんと無愛想な雪奈。父さんは母さんと同じ年で、名前は悠^{ゆう}。童顔に茶色い瞳、癖のある茶髪を短くまとめている。仕事はいたって普通の会社員。サラリーマンというやつだ。普通も普通……よく母さんと結婚出来たな……

「春菜ちゃんはどうした？」

「いつもどうりさ。」

いつもどうり洗面台の前で泣いてるはずさ……はあ。

「いいじゃないか。女装ぐらい。」

「よくねーよ。」

洗面台の方からトタトタと足音がする。来たか……

「悠くーん！葵ちゃんがいじめるよー！」

「ああ、春菜ちゃん。僕らの愛の結晶はいつからこんなにひねくれてしまったんだろうね。」

「昔はあんなに素直だったのに……」

うぜえ……ひねくれたかどうかは知らんが、間違いなくお前らのせいだよ。てか、『くん』と『ちゃん』で呼び合うなよ……結婚何年目だ……！

「葵兄。早くしないと遅れるよ。」

雪奈が冷めた声で言う。雪奈は俺のひとつ下で、同じ高校に通っている。俺と同じ銀髪を耳が隠れる程度に切り揃えている。顔も似ているが、瞳は茶色。セーラー服で鞆を持っている。準備は万端らしい。

「えっ？」

時計を見る。やべえ！バカ夫婦に付き合ってる間にもうこんな時間だ！俺は並んでいた朝食を掻き込んで鞆を取った。

「行ってきます！」

「行ってきます。」

「はい、行ってらっしゃい。」

玄関を出る。

「あ、葵ちゃん！」

母さんが俺を呼びとめた。

「なに？」

何だろう？急いでんのに……

「スカートも買ってきたんだけど、それなら着てくれる？」

「着るかー！ー！ー！ー！」

こうして今日もまた、俺の騒がしい日常が始まるのだった。なるべく平和に暮らせませうに……………

1st Day: 朝はゆっくりしたいよね? (後書き)

はじめまして。でいあシリーズを読んでくれた方にはお久しぶりで
す! ペたです。でいあシリーズで「連載にしてほしい」という嬉しい
意見を頂いたので連載開始です。更新は不定期になりますが、な
るべく早くUPするようにしますので、よろしくお願いしますm(

――) m評価・感想をいただけたら幸いです。それではまた!
【2007/03/08】

2nd Day: 学校で騒いだら怒られます。

急いで家を飛び出したが、別に遅刻ギリギリというわけでもない。
あの家に居るのがめんどくさい………というのもあるが、原因は……
……お隣さんだ。

「行ってきました！」

「はい、行ってらっしゃい。」

俺達が玄関を出てすぐ、お隣の玄関からセーラー服の女の子が出てきた。

「あっ！」

「よ。」

「……おはようございます。」

コイツは俺の幼馴染みでクラスメイトの如月夏澄。きさらぎかすみ 背中まであるさらさらの黒髪が印象的だ。1年の時は違うクラスだったが2年になって同じクラスになってしまった。

「葵、最近早いね。」

「お前が来るからな。」

そう、最近朝が早くなったのはコイツが起こしに来るからだ。幼馴染みが毎朝起こしに来てくれる………それだけ聞けばかなり羨まし

がられる状況だ。実際、夏澄はファンクラブが出来程可愛いわけだし……しかし！夏澄の場合は違う。コイツに関わると何かとめんどくさい事になる。

「む……起こしにいつてあげてるんじゃない！」

頬を膨らませてくれる夏澄。ちょっと可愛い……はっ！？いかんいかん！騙されてはいけない。起こしに来てくれるなら普通に来れば良いものを、コイツはなぜか窓から来る。……俺の部屋、二階なんだけどな……

「じゃあ普通に来い！」

「それじゃ面白くないでしょ？」

朝起こしに来るのに面白さが必要なのか……？それにしたって来るたびに窓ガラスを駄目にされたらたまったもんじゃない。俺はちゃんと鍵を閉めて寝る。つまりどういう事かというと……あれだ、よくテレビとかである窓ガラスを円形に切り取るやつ。どうやら夏澄はあの道具を持っているらしく、毎回窓ガラスが円形に切り取られている。ガラス代も馬鹿にナンネーんだぞコノヤロー！

「……どうでもいいけど遅刻するよ。」

「「えっ!？」」

冷めた声で言う雪奈。お前は何時も冷めてんな……携帯で時刻を確認すると遅刻10分前。なんてこった！夏澄と話してる間に……！雪奈も、もう少し早く言えば良いのに……お前も遅刻するんだぞ？

「急げ!!!!」

「遅れる〜!」

「……ふう。」

俺達はダッシュで学校に向かった。

「ぜえ……はあ……！」

何とかギリギリで間に合った……。俺達は学校の正門にいる。

「葵、大丈夫？」

夏澄が心配そうに聞いてくる。

「葵兄、しっかりしなよ。」

雪奈は相変わらず冷めている。

「だ、大丈夫……ていうか……！」

お前ら速すぎだ！！！なんでお前らそんなに速いんだよ……9分間全力疾走だよ？何で息一つ乱してないの！？

「早く教室に行きましょう。遅刻します。」

「そうね。」

そう言って校舎に向かう夏澄と雪奈。ちょ………待って（泣）

「ふう……………」

あの後、俺と夏澄は雪奈と別れて一ヶ月たってやっと慣れてきた2
・Dの教室に入った。そしてようやく一息ついている。ギリギリだ
ったが、まだ先生は来ていない。

「よう、遅かったな。」

となりの席から話しかけられた。コイツは七星^{ななほしたかと}天斗。黒髪のミディ
アムヘアーで、前髪に赤いメッシュを入れている。小学校からの付
き合いで、親友と呼べる男だ。背が高く、顔も美形でモテる。

「おはよ、天斗。」

「おう。」

夏澄が挨拶をする。俺と小学校からの付き合いと言うことは必然的
に夏澄とも同じぐらいの付き合いだ。学校では三人でいる事が多い。

「良かったね。先生ちよつと遅れてるみたい。」

「ああ、助かったよ。」

「そろそろ来るんじゃないか？」

天斗が言ったすぐ後、メガネをかけた黒髪の女性が入ってきた。

「点呼取るぞ！席につけ、このバカ共が！」

噂をすればなんとやら……。

ナイスタイミングで来たな……そんなでもって、生徒をバカよばわりするこの人が2・Dの担任。やまぐちようこ山口洋子、凛々しい顔立ちに赤縁のメガネをかけていて、肩にかかる程度の黒髪を後ろで結っている。年齢不詳（教えてくれない）だが、見た目は20代前半に見える。元レディースらしく、いろいろとメチャクチャだ。……よく教師に成れたな。

「……よし、全員いるな。えーっと、なんだったかな……何か教頭から話があったんだが………忘れた！各自適当に考えてくれ。」

いやいやいや！大事な話だったらすんの！？

「教頭先生……ついにヅラの告白かな？」

となりの夏澄が真顔で言う。……んなわけねえだろ。

「ほう、いい所目をつけたな如月。確かにあの生え際は怪しいな。」

うおい教師！！なんて事言いやがる！

「なんて事言うんですか。」

一番前の席のヤツが言った。そうだ言ってやれ、誰かよくわからんけどそこの君！

「教頭は教頭なりに頑張って隠してるんですから。」

ええー！？

「よっしゃ！野郎共、今から教頭のヅラを狩りに行くぞ！」
『おおー！！！』×多数

いっせいに立ち上がる生徒たち。

「なんで！！？」

「やれやれ……………」

「あははは♪」

どうして俺の周りはこちらも騒がしいのだろうか……………はあ。

その後、山口先生とその他多数の生徒によって教頭のヅラが発覚した。激怒した教頭により2・D（山口先生含む）は反省分を書かされた……………何で俺まで……………

2nd Day: 学校で騒いだら怒られます。(後書き)

どうも、ぺたです。と言うことで二話目ですね。今回出てきた夏澄と天斗は短編の時にも出てきています。よかったら読んでみてください(宣伝)。山口先生は初登場です。なんか少々ぶつとび過ぎましたね……。これからどうなる事やら。いろいろと絡ませて行きたいと思います。評価・感想をいただければ幸いです。それではまた！

3rd Day.. 友達は選んだほうがいいよ。

学校で一番嬉しい時間、昼休み。昼飯を食ったり、友達と笑いあったりして、楽しい時間を過ごすはず……

『待つて~~~~♪』×女子大多数

「嫌だー！ー！！！」

柚木葵16歳、現在逃走中です。なんでこうなったかと言うと……
：事の発端は四限目終了後、昼休みの始まりに遡る。

~~~~~

「あー疲れたー！」

四限目の授業は体育だった。種目はバレーボール。

「お前はあんまり役に立ってなかったけどな。」

天斗が言う。……うるせえ、背が足りねえんだよ！童顔に女顔、さ

らに背が低いときた。体育の時間は学ランじゃないから余計に女に見られる。体育は男女別なのに……初めての体育の時は先生に、なんで女子がいるんだ。って言われたからな……

「おい。今日はまとめたままにしとくのか？」

着替えて教室に向かう途中に天斗が言った。

「えっ？……あ、忘れてた。」

俺は体育の時はいつも背中まである長い銀髪を後ろでまとめてポニーテールにしている。邪魔だからな。

「まあいいや、このままにしとこ。」

教室のドアを開けて中に入る。席に着いて弁当を広げる。いつも俺と天斗と夏澄で弁当を食っている。

「葵〜！」

いつもどおり、夏澄が弁当を抱えて近付いて来た。……いつもと違うのは夏澄の後ろに見慣れない二人の女の子がいる。ひとりは短い茶髪で元気そうな感じだ。もうひとりは肩にかかる程度の暗めの茶髪にウェーブがかかっている。こっちの子はおとなしそうだ。たしかクラスメイトのはず……

「えーと……誰だっけ？」

一ヶ月過ぎたけど名前って覚えらんないな……二人とも一年の時は違うクラスだったし。

「体育で仲良くなったの！だから一緒に弁当食べようと思って……こっちが由美でこっちが朱鳥。」

由美と呼ばれた方、短い茶髪の元気そうな子が挨拶をする。

「こんのゆみ紺野由美です。って一ヶ月前にも自己紹介したけどね。」

それはそうだ。覚えてなくてごめんなさい……

「えっと……ひばりあすか雲雀朱鳥です。よろしく……七星くんと柚木くん。」

朱鳥と呼ばれた子も挨拶をする。紺野さんに雲雀さんか……あれ？

「なんで名前知ってんの？」

「えっ……なんでって……」

「お前は馬鹿か……」

天斗が哀れむような目で見てくる。馬鹿言うな！

「私、1年の時同じクラスだったから……」

「……………え？」

やべえ……全然覚えてない。そう言われれば見たことあるような

……

「あっ、委員長!？」

「うん、そうだよ。」

「やっと思い出したか……」

そうだ、1年の時のクラスの委員長だ。

「何、3人とも知り合いなの!？」

夏澄が聞いてくる。

「1年の時のクラスメイト。」

天斗が簡潔にまとめた。

「なんか、みんなして仲いいから私だけ仲間はずれみたい。」

紺野さんが言う。そう言えば紺野さんは俺と天斗の事はよく知らないよな。

「えっと、俺は……………」

「あゝいいよ。柚木葵ちゃんと七星天斗くんでしょ?」

知ってた……………なんで?

「少なくともこの学年で君らの事、知らない人はいないよ。」

「なんで?」

そう言うとき紺野さんにはっこり笑って言った。

「君らそんな目だつ頭してるんだもの。」

赤メッシュと銀髪……………確かに目立つな。しかも俺、蒼眼だし……………

「3年でも有名だよ? かつこいい赤メッシュの子と可愛い銀髪の子

がいるって。」

可愛い、か……そんなんで有名になっても……嬉しくない……

「それじゃ、改めてよろしく。紺野さんに雲雀さん。」

「由美でいいよ。紺野さんって堅苦しいし。」

「私も朱鳥でいいですよ。」

「わかった。俺も葵でいいよ。」

「俺も天斗でいい。」

こうして、昼食が始まった。二人とも仲良くなれそうだ。

きっかけは紺野さ……由美の一言だった。

「葵くんてさ、化粧してないの？」

「……はい？」

いきなり何を言い出すんだ。化粧なんてするわけないだろ。

「してないよ。」

「むう、すっぴんでこれか……」

……なんだろう。凄く嫌な予感が……

「な、なに？」

「いやあね、ポニーテールにしてるの見てたらさ、可愛いな〜って  
思ってた……」

……………なんだ？

「化粧とかしてさ、完璧に女の子の格好させたら可愛いだろうな〜  
って。」

「じゃあ、させてみよっか！」

いやいやいや！夏澄のやつなに言い出してんの！？

「面白そうだね〜。」

「でしょ？」

にこにこしながら席をたつ二人……………おい、なにするつもりだ！？

「ちょっとまっててね〜。」

「逃げたら許さないから♪」

どっかに行っちゃった……………あの二人、本当に今日仲良くなったの  
かよ……………息、ぴったりじゃん。

「行っちゃったね。」

「ああ。葵、逃げなくて良いのか？」

「無理です……………逃げたらどうなるか……………」

許さないから♪って言って行きやがったしな……

「なあ、朱鳥…………」

「なに？」



「あの二人止めて……」

「うーん……あんなったら由美ちゃんは止まらないから。それに……」

「それに？」

「私も葵くんの女装見てみたいな♪」

さいですか……てか、すっごくいい笑顔だよ。眩し……

「「おまたせ〜！」」

5分後、二人は戻って来た。

「……………何で体操服？」

夏澄は体操服に着替えていた。

「着替えたの。」

いや、そこはわかってるって！

「葵はちっちゃいから、私の制服が丁度良くなって♪」

……………まちで？ まちで着替えさせる気！？ ジリジリ近付いて来ないで……！！

「さあ葵くん、着替えて！」

由美が急かす。……君、今日友達になったんだよ？いきなり女装を強要されるとは……

「葵、観念なさい！」

「出来るかー！ー！！！」

俺は全速力で逃げ出した。

~~~~~

とまあ、そんな経緯で現在逃走中な訳だが……

『待って~~~~！』×女子大多数

……あれ？人数、増えてるよね！？二人だったはずが、女子の軍勢が出来上がっている。

「くっそ~~~~！！」

俺は角を曲がった。……行き止まり！？

「ちっ！」

苦し紛れに空き教室に逃げ込んだ。

「こっちよ！」

由美の声と共に沢山の足音が近付いてくる。どうする俺!?

「葵♪」

突然呼ばれて振り返る。

「か、夏澄……なんでここに………?」

「待ち伏せ♪」

さすがは幼馴染み。終わった………いや、まだだ!諦めてたまるか!

「助けてあげてもいいよ。」

………なに?

「今度買い物に付き合ってくれたら助けてあげる。」

つまり、俺に財布になれと………

「………分かった。」

「じゃ、これにサインして!」

夏澄は紙とペンを取り出した。………用意がいいな………

「ほらよ。」

俺はサインをして渡す。

「契約成立ね♪ほら、そのロッカーに隠れて。上手く誤魔化してあげる。」

俺は言われた通りにロッカーに身を隠した。

「あ！夏澄」

由美の声が聞こえる。……危ねえ。ギリギリか……

「葵くんこっちに来なかった？」

助かったぜ。夏澄が味方してくれなければ……

「この中よ。」

……あれ？

「ここに隠れてるわ！」

あっさり裏切りやがった！！？ロッカーが開く。

「夏澄、裏切ったな……」

「ふふ、敵の言葉を簡単に信じたらだめよ。」
「さあ、葵くん諦めて着替えるのよ！」

嫌だ………！

「着替えさせるわよ！」

『おー！ー！』×女子大多数
「嫌だー！ー！ー！ー！」

空き教室に俺の叫び声と女子の楽しそうな声が響いた。

その後、俺は女子の軍勢に引っ張られながら教室に戻って来た。

「葵……………」

「葵くん……………」

天斗と朱鳥がこっちを見ている。

「どう？天斗、朱鳥。可愛いでしょ？」

「葵くん……………いや、葵ちゃんだね♪」

夏澄と由美が爆笑している。……………ちくしょー！着替えさせるどころか、化粧までしやがった……………

「葵……………」

天斗がジロジロ見てくる。笑いを堪えて……………

「笑いたけりゃ笑えよ……………」

「笑わないよ！」

朱鳥が真剣な顔をして言う。

「だってとっても似合ってる。葵くん可愛い♪」

それ、フォローになってねえよ……俺の周りは敵しかいねえ……
……

「俺の日常（学ラン）を返せー！ー！！！」

おまけ

5限目……

「点呼取るぞ。」

名前が呼ばれていく。そして……

「柚木。」

「……………はい。」

「よし次。」

あれ、スルー？そんなに違和感無いのか……………（泣）

3rd Day: 友達は選んだほうがいいよ。(後書き)

どうも、なんだか睡眠不足のぺたです。ちょっと更新が遅れてしま
ってすみませんm(〃)m 短編の方を書いてたら……………

と、いうわけで今回は新キャラのことを……………。まず、雲雀朱鳥に
ついて。朱鳥は短編の頃から考えてました。天然っぽく書けてれば
いいですが……………

次に紺野由美について。由美は今話の構想中に考えたキャラです。
なんか夏澄と被りそう……………

こんな感じですがこれからもよろしくお願いします。評価・感想を
いただければ幸いです。それでは。

【2007/03/16】

4th Day: 例えるなら魔王VS勇者（LV. 1）。

「マジで!!?」

「うん。昨日メール来た。」

今日は日曜日。一週間で最も素晴らしい日。夏澄も由美も山口先生もない……………つまり、俺を困らせるのは母さんしかないという素晴らしい日だ。Nice Sunday!!!! ……なのに……………!!

「冬姉が帰ってくるのか……………」

「うん。そうじゃなきゃこんな早く起きないよ。」

……………もう10時だけどね。雪奈は朝が弱いからな。雪奈にしては早く起きたほうだ。しかし冬姉が……………! 冬姉とは俺たちの実の姉で、本名は柚木冬美^{ゆずきふゆみ}。現役のモデルだけにスタイルは抜群だが、性格は悪い（俺にだけ）。

「あら、冬美ちゃん、帰ってくるの?」

「うん。そろそろ来るんじゃない?」

「あら、楽しみ〜。」

今日唯一、俺を困らせるはずの母さんも……………冬姉の前では霞んでしまう。

「葵ちゃん、お洋服買ってきたの！」

スカートを見せる母さん。

「着ねえよ……………」

かまってられねえ……………！

「雪奈ちゃん……………葵ちゃんが冷たいわ……………！」

いじける母さん。

「あっそ。」

「……………」

冷たく返す雪奈。……………雪奈に同意を求めたのは間違いだったな。
俺より冷たい、というよりめったな事には関心を持たないからな。

「冷たい……………冷たいわ！二人とも！！！」

「普通だろ。」

「うん、普通。」

「……………二人でいじめる……………悠くん早く帰ってきて……………うわ
ん、さみしいよ……………」

本格的にいじけ始めた。めんどくさ……………

「たっだいま……………！！！」

……………この声は……………！！

「冬美ちゃ〜ん!!! おかえり〜ん!!! そして助けて! 葵ちゃんがいじめるよ〜!」

俺だけ!? 雪奈は!!!?

「……………」

雪奈を見ると素知らぬ顔して漫画を読んでいる。…………このやろー!
! ドタドタと足音が近付いてくる。

「葵〜!」

「ぐはっ!?!」

足音の主、父さん譲りの茶色の癖っ毛に、母さん譲りの蒼い瞳のその人…………冬姉は帰ってくるなり俺をどついた。…………ってえ (泣)
!!!!

「母さんを泣かすとはどういうことよ!」

「ぐへっ!?!」

もう一発…………痛い (泣)!

「まったく! この際だから教育しなおしてやるか……………」

首を掴まれて揺さぶられる。…………し、死んでしまう!!!!

「冬姉、その辺にしとかないと葵兄死んじゃうよ?」

「いいのよ。馬鹿は死ななきゃ治らないんだから。」

「ふーん。」

良くねえ！！！そして雪奈も『ふうん』じゃなくて助けてくれよ！
……………てか、本当死ぬ……………！ああ……………意識が……………ここで俺
の意識はブラックアウトした。

「次はどうしよつか。」

「うーん、そうねえ……………これなんかどうかしら、冬美ちゃん。」

「……………」

……………なんだこの状況……………。

意識が戻ると、そこには難解な状況が出来上がっていた。

場所は確にさっきいたダイニングだった。

ただ、さっきまでと違うのは、いたるところに積み上げられた洋服
の山。部屋一面服服服、服だらけだ。その洋服の山を母さんと冬姉
があさりながらあれこれ言っている。ただ一人雪奈だけがさっきま
でと変わらず漫画を読んでいる。……………ページの進み具合いから見
て、気絶してたのは30分ぐらいか……………

「じゃあこれで……………あら、葵ちゃんおはよう♪」

ご機嫌で挨拶する母さん。……………おはようじゃねえよ！てか、なん
でそんなにご機嫌なんだ？

「起きちゃったか……………チッ！」

舌打ちした！！酷くねえ？気絶させておいて、気が付いたら舌打ち

!?

「……………ん?」

よく見ると冬姉の手にはデジカメが握られている。……………散乱する女物の服と冬姉の手のデジカメ……………まさか!!?」

「やっぱり……………」

自分の体を見てみるとそこにはフリフリのエプロンドレス……………いわゆるメイド服。

「何してくれてんだー!!!!」

「葵の着せかえ兼、母さんが買ってくる葵用の服の整理。及び写真撮影よ♪」

冬姉はにこつと笑ってデジカメを構え、シャッターを切る。……………悪魔だ。

「いやゝ楽しかったわゝ♪」

満足そうに笑う母さん。楽しかったわ♪じゃねえっての!この大量の服はどこから出てきたんだ……………てか、よく見たらメイド服だけじゃなくてナース服やらセーラー服やらまである。……………なに考えて買ってきてんだ!!!

「これでまた一つ弱みが増えたわね♪」

笑顔でとんでもない事を言う冬姉。

「言うこと聞かなかったらこの写真、実名付きでネットに流すから」
♪

……………そこまでしなくても……………（泣）

「ちゃんと言うこと聞くのよ。」

ふふふ……………と、我が家の魔王は残酷な笑みを浮かべた。……………俺が一体何をしたっていうんだ……………

「……………それでお仕事のほうはどう？」

あれから30分。すっかり部屋も片付き、母さんと冬姉は何やら話している。俺はというと、いまだにエプロンドレスに身を包んでいる……………冬姉の命令で今日一日この家のメイドをやらされている。

「いい感じだよ。また表紙貰えたし。」

「あら凄い！頑張ってるわね。」

冬姉は今やカリスマモデルとして、有名になってきている。雑誌の表紙などでもみかける事が多くなった。……………写真じゃ、性格までわからんからな……………

「葵、お茶。」

「……………はい。」

「違う！返事は『少々お待ちくださいませ、ご主人様』でしょ！」

言えるか！てか、自分で言っけて恥ずかしくないのか？

「聞こえないのかな？葵、お茶！」

デジカメをちらつかせながら微笑む冬姉。……うう、魔王だ……

「少々お待ちくださいませ、ご主人様……」

「くくっ……あははははっ！！！」

自分で言わせという笑うなよ！！

「笑うなよ！」

「無理……ふふっ……！」

……泣いていいかな？いいよね、この状況……

「葵兄、私も。」

「あら！じゃあ母さんにも♪」

「自分でやれ！」

なんで俺が……

「葵、デジカメ♪」

「少々お待ちくださいませ……ご主人様……」

……この家に俺の味方はいねえ……

「こんな家大っ嫌いだー！！！」

明日から一体どうなるんだろう（主に俺が）……………これからの事に不安を覚えながら今日も過ぎて行くのだった……………

今日のまとめ☆

魔王（冬姉）が帰ってきた！ Ⅱ家に安息の地がなくなった。

4th Day: 例えるなら魔王VS勇者（LV. 1）。（後書き）

どうも、最近しんどいぺたです。肉体的に物凄いしんどいです……
…どうでもいいですか？ どうでもいいですね。

と、いうわけで（？）今回は冬姉が帰ってきました。短編を読んでもくださったかたには再びですね。冬姉はこれからいろいろやってくれると思います、多分（人事）。

評価・感想をいただけたら幸いですm（　　）m それではまた～！

【2007／03／31】

5th Day.. 選挙は公平に行うべきです。



校内に鳴り響くチャイムが授業の終りを告げる。

「よっしゃ！授業終わり！また明日！」

高らかに宣言する山口先生。山口先生の担当は現代社会。この人に社会の仕組みについて教えられるとは………てか『よっしゃ!』って言うなよ、教師。

「あゝ終わった……」

「お前は寝てただろ。」

隣で天斗が言う。

「うるせえな。いいじゃんか！」

「ああ、いいぞ。殴られるのはお前だからな。」

「……！」

山口先生の授業は居眠りするやつが少ない。なぜなら、寝ていると容赦なく拳が飛ぶからな。いいのか、教師として……………？

「葵、
歸ろ
♪」

夏澄が前の席から振り向きながら言う。

「部活はいいのか？」

「うん、今日は休みなの。」

合気道部が休みか……珍しいな。

「香織さんが生徒会の会議でいないから休みなの。」

なるほど。そういえば今日は生徒会の会議があるって山口先生が朝から言ってたな、珍しく。ちなみに香織さんというのは合気道部の主将で、フルネームは宮野香織さん。みやのかおりショートカットの黒髪でボーイッシュな美人である。合気道はもはや達人レベルでめっちゃくちゃ強い。

「じゃあ帰るか。」

「うん♪」

「それじゃあな、天斗。」

「バイバイ！」

「おう、またな。」

さて、帰ろ……

『全校生徒に連絡です！今から生徒会役員の選考会を開いちゃいます！生徒会に入りたい人は体育館に集まってね☆』

席を立った俺の耳にスピーカー越しの明るい声が聞こえた。この声は間違いなく香織さんだ……うーん、軽いな。そんなノリでいいのか生徒会！？てか、普通は選挙でしょ！

『あ、ちなみに2、Dの柚木葵くんは参加決定です！逃げないよう
に♪』

なにぃ！？なんで？なんで俺だけ強制参加なんですか、香織さん！？

『それじゃ、待ってるよ！みんな来てね☆』

ああ…………『待ってるよ！』は明らかに俺宛てのメッセージだな…
……

「と、いうわけだから行くわよ葵ちゃん！」

「香織さん！？」

いつの間に…………！てか、今放送してたよね！？

「さあ、レッツゴー☆」

香織さんが俺の手首をぐいぐい引っ張る。てか、香織さん力強すぎ
！痛いデス！！！！

「ちょ、お前ら助け……………」

「じゃあ、また明日ね♪」

「じゃあな葵。」

夏澄と天斗はにこやかに手を振っている。帰る気満々か！薄情者（
泣）…………！

「た、助ける…………！！！！」

叫びも虚しく俺は香織さんに引きずられながら体育館へと向かった。

校舎の隣にある、たいして広いわけでもない我が校の体育館は生徒会役員選考という名目のもとにかなりの生徒が集まり、ザワザワと騒がしかった。香織さんは未だに俺の手を引きながら人混みを掻き分けていく。……………いつまで引っ張るんですか香織さん。

「佑李！」

香織さんはステージの近くにいた人物に話しかけた。

「ん？香織か。」

話しかけられた人物は振り向いた。肩にかかる程度の黒髪に、整った顔立ち。着物がよく似合いそうな和風の美人だ。

「柚木も来たか。」

「まあ、一応……………」

この和風美人はこの学園の生徒会長である獅堂佑李^{しどうゆり}さん。家は剣術の道場らしく、佑李さんも達人レベルだ。……………来たっていうか、無理やり連れてこられたんですけどね……………。

「よし、始めるか！」

そう言うと佑李さんはステージの上に上がった。

「今から生徒会役員選考会を開会する。」

佑李さんがそう宣言すると生徒会役員の皆さんは、なにやらプリントを配り始めた。……なんだ？俺はそのプリントを眺める。

― 生徒会役員志願書 ☆ ―

以下の項目をちゃんと記入してネ！※ちゃんと記入しないと失格になっちゃうよ♪

- ・ なまえ
- ・ クラス
- ・ 住所
- ・ 趣味
- ・ 特技
- ・ ひとこと

記入したら近くの生徒会役員に渡してね♪

……………これ書いたの絶対香織さんだよ。てか住所必要!?!?ちゃんと個人情報守ってくれるんですか!?!?俺は回ってきたペンを走らせ、必要事項を記入した。

「葵ちゃん書いた?」

「うわっ!?!?」

突然、香織さんが後ろから覗き込む。

「あ、はい。」

俺は志願書を香織さんに手渡した。

「佑李!?!判子貸して。」

「わかった。」

そう言う佑李さんはステージの上から印鑑を投げた。……………物凄い速度で。

「ありがと。」

香織さんはそれを無造作に、しかもノールックでキャッチした。……うゝん、生徒会ってのは達人の集まりなのか?

「ほい、採用っ♪」

「はい!?!?」

いいの！？そんな適当でいいの！！？今、文章に目を通してすらないですけど！？

「香織さん？」

「なあに？」

「その……いいんですか？そんなんで。」

「いいのいいの！葵ちゃんが生徒会に入るのは映画の時から決定事項なんだから♪」

にっこりと微笑む香織さん。なるほどね、既にあの時から決まってたわけね（でいあ まい はいすくーる！参照）。あはははは……
……あゝ、涙でてきた。

「それじゃ、審査して来るからね！ばいばい♪」

俺は確実に選ばれるんだろうな………印鑑押してたし。てか、俺を生徒会に入れて何をさせるつもりなんだろうか………

「葵くん！」

「ん？」

物思いに耽っていると、隣から声をかけられた。

「朱鳥！」

振り向くと隣には朱鳥がいた。朱鳥も来てたのか………

「なんでこんなところにいるんだ？」

「私ね、生徒会に入りたいの。」

すっごくいい笑顔で言う朱鳥……………なるほど。ってか考えてみればあたりまえだな。ここ、生徒会役員選考会会場だし。

「葵くんも生徒会に入りたいの？」

「ま、まあ……………」

無理矢理連れて来られたんだけどね……………その笑顔を見たら別に入りたくない、なんて言えないっての……………

「二人とも入れると良いね♪」

「そうだね……………」

ああ、笑顔が眩しい……………。

それから30分程して——…

「お待ちせー！」

マイクを持ってステージに上がる香織さん。やっぱり軽いなあ……………。

「採用者を発表します。採用はこの人達！」

ステージにはスクリーンとプロジェクターが用意されていた。……………

いつの間に！みんな名前が映し出されたスクリーンを真剣に見つめる。

「あった！」

「あった……………」

やっぱり選ばれてる。あはは…………俺になにさせるつもりなんですか生徒会のみなさん…………？隣では朱鳥が喜んでいる。朱鳥も採用か……………

「良かったね！葵くん！」

「うん……………」

朱鳥は相変わらず眩しい笑顔……………そんなに嬉しいのか？

「何で俺が選ばれてねえんだよ！！！」

突然、誰かが叫んだ。叫んだのは不良っぽい男子生徒。あゝいるよねゝこういうやつ。

「理由を聞きたいか？」

男子生徒を見つめながら佑李さんが言った。

「言ってみろよ！」

「わかった。まず、窃盗・万引き等の前科27犯。次に校内での喫煙15回。さらには登下校中のポイ捨て182回。最後にお前の志願書は字が汚くて読めん。そんな貴様を生徒会に入れるわけにはいかない。出直して来い！」

うわぁ…………。どうやって調べたの？怖っ！てか、何でこの人は生徒会に入ろうと思ったんだ。

「ち、ちくしょー！いいじゃないか字が汚くたって（泣）！」

そう言って男子生徒は走り去って行った。…………字が汚いこと気にしてたんだ…………

「他に、不満のあるやつはいるか？」

黙り込む会場。あの後じゃ誰も不満なんて言えないって。

「それでは解散だ。生徒会役員になった者は来週の放課後に集まるように。以上、解散！」

会長の声と共に生徒会役員選考会は閉会した。

「会長、かっこいいね。」

朱鳥が目をキラキラさせながら言う。

「まあな。」

「よくポイ捨ての回数なんてわかるよね！」

そこ！？憧れるところそこの！！？

「私もあんな風になりたいな。」

…………やめてくれ！これ以上とんでもない人が俺の周りに増えたら身が持たねえ！！！今でさえしんどいのに……………何で俺がこんなに疲れなきゃならないんだ（泣）！！！！

こうして生徒会役員選考会は幕を閉じた。ああ………疲れた………

5th Day: 選挙は公平に行うべきです。(後書き)

どうも、学校が始まって憂鬱なぺたです。久しぶりの更新な気がします(気のせいではない)。

今回は短編からいるキャラを出しました。生徒会長、獅堂佑李と合気道部主将、宮野香織です。キャラ強いですね……。二人ともこれからたくさん出てくると思います。てか出します！

あ、そう言えばわんだふるでいずのアクセス数が1300を越えました！ちよっとほったらかしにした間に……。 (ダメじゃん！)。とにかく嬉しい限りです！これからも頑張ります！

評価・感想をいただけたら幸いです。それではまた！

【2007／04／16】

6th Day: 僕と彼女のちょっと長い1日 そのいち

冷たい朝の空気、差し込む朝日の中で私は目を覚ました。

「ふぁ……………」

時計はAM5…39を示している。彼はまだ起きてないはず…………

「……………よし♪」

私は部屋の窓を開け、ベランダに出る。家のベランダと彼の部屋のベランダは隣接しているので容易く入ることが出来る。ゆっくりとベランダの手すりに手をかける。

「よっ…………と。」

見慣れたベランダ。私のお隣さんの部屋。そっと窓を開ける。昔は鍵が締まっていたが、最近は開けてある。……………つまんない。

「……………」

窓から入ってベッドの横に立つ。ベッドでは長い銀髪の可愛い女の子がすやすやと気持よさそうに寝息をたてている。……………可愛い……………私より可愛いなんて……………許せないっ！

「ていつ」

幼馴染みが眠るベッドに飛び乗る。

「ぐはっ!？」

葵は飛び乗られてうめいた。

「おはよっ葵♪」

+

「ぐはっ」

快適な睡眠の中にいた俺にとんでもない衝撃が襲いかかった……………
 ってえ誰だ!!!!

「おはよつ葵♪」

お前かー！って、まあ予想通りっちゃあ予想通りなんだけど……

「『おはよっ♪』じゃねえ!!!いきなり何しやがる夏澄!!!?」

「朝のスキンシップ……………かな?」

「俺に聞くな!!!」

「たたく、コイツはいつもいつも!!!」

「葵、買い物行こう!」

「えゝ何で俺が……………」

「はい。」

夏澄は何やら紙切れを差し出した。……………どっから出したんだ?てか、降りろ!

「なんだこりゃ?」

その紙には契約書と書かれていて、真ん中位に俺の名前がある。こ、これは……………!

「約束は守ってくれなきゃ♪」

それはまさしく学校で女子大多数に追い掛けられた時の……………(3 r
d Day参照)!

「待て!あの時お前は裏切ったハズだ!」

そう、あの時夏澄はあっさり裏切った。

「そんな契約、無効だ!」

「甘いわね。その契約書をよく見なさい!」

まさか……！俺は契約書に目を走らせる。そこには夏澄の丸っこい字でこう書かれていた。

— 契約書 ☆ —

私はこの契約の後になんたな事が起きても契約内容に従います☆

- ・ 買い物に付き合うこと。
- ・ 私が行きたい所に着いてくること。
- ・ 金額は全て葬が負担すること♪

私

柚木葵

は、以上全てに同意します♪

……やられた。なにコレ？俺に利益なんて全くないじゃん……何て理不尽な契約書だ……だが！ここで退くわけにはいかない！！俺の諭吉がかかっているからな！

「こんなん認めねえぞ！」

「ちゃんと読まないからでしょ。」

「あの状況で読めるか！！！！だいたい……」

「朝っぱらからうっさいわよ葵！！！」

「ぐはっ！！？」

突然、側頭部に鈍器で殴られたような痛みが走る。まさか……。恐る恐る振り向くと、ドアの前に冬姉まわうが立っていた。

「冬姉……」

「あら、夏澄ちゃん来てたの？」

「おはようございます冬美さん。」

「はい、おはよう。」

「冬姉……！」

「今日は何しにきたの？」

あれ？俺シカト！！？

「冬姉！」

「葵と買い物に行く約束をしてて……」

待てコラ！約束してねえぞ！！！！てか、お前もシカトか！！！！

「なんだ、デートか♪不束かな弟だけどよろしくね！」

「ち、違いますよ!!!」

「冬姉!!!!」

「あゝもう! さっきからうっさいわね!!!!」

扱ひ酷くない(泣) !? まあ、いつもの事だが.....

「さっき何投げた?」

「土鍋。」

土鍋!?!? 足下を見ると確に土鍋が転がっていた。マジで死ぬよ? てか、よく無事だったな、俺..... てか、なんで土鍋なんだ.....!?

「なんで土鍋.....?」

「フライパンがよかった? それともまな板?」

どれも一緒だろ!!!! てか、投げないという選択肢はなかったのか.....

「そんなことより早く出掛けなよ。」

「は? なんで?」

何を唐突に言い出すんだこの人は.....

「夏澄ちゃんとデートの約束してるんでしょ?」

「そんな約束してねえ! てゆうかデートじゃないし! だいたい.....
「行け。」

「.....はい.....。」

怖えよ.....目がマジだよ.....行かなきゃどうなるか.....! てか、なんでいっつもこんな目に.....神様どうか俺の苦勞を半分で

いいから天斗にでもお裾分けしてやって下さい…………マジで（泣）
！！！！

「葵〜！こっちこっち〜〜♪」

「はぁ……………」

夏澄はにこにこしながら俺を洋服の専門店に引っ張っていく。…………
…と、いうわけで現在俺たちはいつものアーケードに来ている。こ
こには洋服やアクセサリーの専門店が軒を連ねていて、買い物と言
えばここに来る事が多い。……………それにしても……………楽しそうだ
なぁ、おい。

「あっコレ可愛い♪」

夏澄は何やら洋服を手を持っている。

「はい！お金払ってきてね♪」

「はぁ……………」

「葵、さっきから溜め息ばかり。」

そりゃ溜め息も出るっての。これからいくら払わされるんだろ…………
…………

「頼むからさ、今日は勘弁して……………」

俺の諭吉がいなくなってしまう！……まあ、頼んだところで止めてくれるハズがないけど……

「うん、いいよ。」

「ああ、やっぱりダメ……へっ！？いいの！！？」

なんで……！！？

「うん。別に欲しいモノ無かったし。」

うおい！じゃあ俺は何のために！？

「ただ、葵と一緒に出掛けたかっただけ。」

「なんでだよ……」

「だって好きなんだもん……」

え……ええええええええええ！！？ちよ、マジで！？いきなりそんなこと言われても……

「葵が困るのが♪」

コノヤロー（泣）！！！！なに！？嫌がらせ目的で買い物に誘ったの！！？

「と言うわけで、買い物しないからちよつと付き合って！」

どう言うわけだ！

「何すんだよ。」

「行きたいトコがあるの♪」

どこ行く気だ……？まあ、俺の諭吉がいなくならないんないいか。

「別にいいけど……」

「やった♪」

なんだ？そんなに嬉しいのか？ま、ちよつとぐらいなら付き合ってるか……無理矢理とはいえ、いちおう約束だからな。

「……………」

「早く入ろうよ。」

夏澄に連れられて俺はとある店の前に立っている。並んだテーブルとイス、赤やピンクで無駄にファンシーな内装、そしてエプロンドレスの従業員……メイド喫茶だ……！

「夏澄……………」

「なに？」

「なんでここに……………」

この店は少し前に来たことがある。というか働いた……………メイドと

して……。出来れば忘れたい（泣）！

「桐子さんがね、『最近赤字続きだから葵を連れてこい！』って言うってた、って香織さんが言ってたから♪」

やっぱりあの二人か！！！てか、俺を買い物に誘った理由はコレか！！？桐子（桐子）さんはこのメイド喫茶『LUCIFER』の店長だ。この名前はどうかと思うが……。それでもって香織さんはここでバイトしている。ある時、人手が足りないということで俺と夏澄が手伝わされた。俺、男なのに……。 （泣）。まあ、とにかく臨時のバイトだったハズなんだが、なぜか桐子さんの中では俺は従業員という事になっているらしい。……。なぜ？

「こんにちわ〜！」

って、おい！ちょっと待て夏澄！！！夏澄が声をかけると、奥から黒髪のショートヘアのボーイッシュなメイドさんが出てきた。

「あ〜やっときた！！！」

奥から出てきたのは……。やっぱり香織さんだ……。

「葵連れてきました！」

「夏澄偉い♪」

「えへへ♪」

えへへ♪ぢゃねーよ！

「さあ葵ちゃん入って！」

「いや、ちょ、待って………」

ぐいぐいと俺の手を引く香織さん。痛いって！肩抜けるから（泣）
！！！！

「ちょっと待てー！ー！！！！」

こうして俺のちょっと長い一日が始まったのだった――…

6th Day: 僕と彼女のちょっと長い1日 そのいち（後書き）

どうもこんにちわ。早くも夏バテ気味なぺたです。最近暑くって……どうでもいいですね……

はい、というわけで今回はそのいちなのでもちろん続きます。今回の新キャラは桐子さんですね。彼女はとらぶるめーかーにもいます。名前が出てません。ぷらすでやっと名前が決まりました。どうせならわんだふるでいずにも出そう！ということとで登場です。って今回名前しか出てないけど……次回をお楽しみに♪

そして、突然ですがでいあシリーズの時系列を……

でいあ まい とらぶるめーかー！

←←←

でいあ まい ふぁみりー！

←←←

でいあ まい はいすくーる！

←←←

でいあ まい とらぶるめーかー ぷらす！

←←←

でいあ まい わんだふるでいず！

という具合です。わかりにくいかなーと思ったのでいちおー補足しておきました。

出来れば評価・感想をお願いします。いただけると幸いです。それではまた！

【2007/04/30】

7th Day: 僕と彼女のちょっと長い1日 そのに

葵とよく来るアーケード。今日は少し前に臨時でバイトしたメイド喫茶『LUCIFER』に来てる。

「ちょっと待てー！ー！！！」

葵は嫌がりながらも香織さんに無理矢理『LUCIFER』に連れ込まれている。さすが香織さん♪

「夏澄も早くおいで。」

「はい。」

香織さんと葵の後ろを着いていって『LUCIFER』に入る。赤やピンクでファンシーに飾り付けられている店内にはこないだバイトした時よりも沢山のメイドさんがいた。こないだは全員腹痛だったっけ？よく覚えてないや♪

「店長！ウチのNO.1が来ましたよ！」

「誰がNO.1ですか、誰が！」

香織さんの発言にすかさず突っ込む葵……………うゝん、絶妙のタイミングだね♪

「おゝ！やっとなたか葵！！」

奥からスーツを着たスリムな女の人が見えた。この人が店長の桐子さん。綺麗な顔立ちに青縁の眼鏡をかけていて、長い黒髪をポニーテールにしている。スーツが似合うなあ……………メイド喫茶にスーツはどうかと思うけど。

「いや、来たっていうか、騙されたというか……………とにかく帰っていいですか？」

「逃がすか!!!!」

「痛い！桐子さん、痛いですって！肩ミシミシいってますよ!!!?」

桐子さんは逃げようとする葵の肩を掴んでいる。

「それじゃあ、さっそく着替えてくれ！」

「えっと、だから……………」

「てい♪」

突然葵が崩れ落ちた。桐子さん凄い！手刀で葵を気絶させるなんて……………

「さあ、今の内に着替えさせるわよ！」

「店長、この服で良いですか？」

「オッケー♪あ、夏澄も着替えさせるの手伝って。」

「はぁ～い♪」

ふふふっ♪今日も楽しくなりそう♪

+++++

俺は赤やピンクで無駄にファンシーな部屋で目を覚ました。ここどこだ？

「あ、葵起きた？」

夏澄が気付いて近づいてきた。そっか、夏澄と出掛けてたんだっけ………そんなもって『LUCIFER』に行つて………あれ、なんで俺寝てんの？

「目を覚ましたか。」

「葵ちゃんおはよー♪」

部屋には桐子さんと香織さんもいた。

「俺なんで寝てたんですか？」

「いや、まあ、なんというか………つ、疲れとかが溜まってたんじゃ

ない？」

なんだ、動揺したぞ？まあいいか。俺はスースーする脚を気にしながら起きあがる。………ん？なんで脚がスースーするんだ？………まさか！………よく見るとそこは更衣室。更衣室までファンシーになくてもいいんじゃない？………って今はそんな場合じゃない！そばにあった鏡で自分の姿を見る。

「あんたら………何してくれてんだ！………！」

そこに写ったのはフリフリのエプロンドレス、頭にはカチューシャ、そして銀髪のツインテール。それはまごうことなきメイド。悲しくなるくらい似合っていた。………ちくしょー（泣）！！！！

「葵ちゃん、可愛い♪」

「さすがウチのNo.1だ！」

うるせー！！！！嬉しくねえよ！！！！

「よっしゃあ、開店だー！！！！」

「おー！！！！」×2

ちよっと待つて………（泣）！！！！

開店から一時間――…。店内はポツポツと客が入り始め、だんだんと忙しくなってきた。何で夏澄や香織さんよりも俺の方が指名が多いんだ……。確かにこのカッコは抜群に似合ってたけど……。あゝ悲しくなってきた。

「葵ちゃん！そっちの席からご指名だよ♪」

「……………」

「返事は？」

「……………はあゝい。」

怖いです香織さん……。香織さんが怖いから行くか……。新しく客が来たテーブルに行くと、金髪の男がいた。なかなか美形だな……。タメぐらいかな？なんかホストっぽい。こんなやつもメイド喫茶に来るのか……。人は見掛けじゃ分かんないな。

「お帰りなさいませ御主人様♪御注文はお決まりでしょうか？」

あゝ……。泣きてえ。なんで俺こんなことしてんだ……。

「……………」

あれ？黙ったまんまこっち見てる……。なんだ？

「御主人様？」

「……………」

……………も？

「また来るからね♪」

「お待ちしてます……………」

バイバイと手を振りながら金髪が遠ざかっていく。仕事上仕方なく俺も手を振り返す。……………何だったんだあの金髪は。

「コアなファンが出来て良かったな！」

うんうんと頷きながら言う桐子さん。……………良くねーよ。

「そろそろ休憩していいよ。昼飯はカレー用意してあるから。」
「分かりました。」

頷いて奥へと足を運ぶ。ふゝ、やっと休憩か……………

「あ、葵ちゃん！」

「葵おつかれ♪」

奥の部屋では夏澄と香織さんが休憩を取っていた。

「ああ……………」

全くだ。ただでさえ指名が多いのにあの金髪の相手までして……………
疲れた……………。椅子に座って机に置かれているカレーを口に運ぶ。
うん、うまい。

「いやゝ流石だね葵ちゃん♪」

「何がですか。」

まったく！何で俺がこんなに指名されなきゃならんのだ！

「生徒会での活躍も期待してるよ♪」

これ以上俺に何させる気ですか香織さん……………。

「佑李にも伝えとかなきゃ！」

何を！？何を伝えるんですか！！！？生徒会ぐるみで何やらせる気だ……………ん？

「何やってんだ夏澄？」

「何でもないよゝ♪」

何やらケータイをいじりながらにっこりしている……………ちよつと可愛い……………じゃない！何やってんだろ？

「何だよ、気になるだろ。」

ひょいと夏澄の携帯を覗き込む。画面に写っていたのは蒼眼で銀髪ツインテールのエプロンドレスの女の子……………俺！！？

「よし、待ち受けに設定完了♪」

何やってんだ……………！！？いつ撮ったの！？？てか、待ち受け！？

「あ！可愛い♪後で私にも送って！」

「分かりました♪」

「生徒会のみんなにも送ってあげよ。ふふっ♪」

やめて！それ以上広げないで！

「夏澄……お前その写真、学校で皆に見せる気だろ。」

それだけはやめてほしい……

「えゝそんな事しないよ。面倒くさいもん。」

「それならいいけど……」

「安心して！あの写真はロックかけて大切に保存するから♪」

にっこり微笑む夏澄。出来れば消去してほしいが……まあ、広まらないならいいや。

「さあ、休憩終わり！働くよ。」

「はゝい！」

香織さんと夏澄はそう言って部屋を出ていく。

「はあ……」

あと半日頑張りますか……出来れば頑張りがたくないが。

7th Day: 僕と彼女のちょっと長い1日 そのに(後書き)

どうも！最近雨続きで元気が出ないぺたです。雨が降るとどうもテンションが………はい、どうでもいいですね。

今回は前回からの続きです。もういっかい続きます。今回は特に言うことはないです、はい。

なので内容とは関係ない事を。この小説のアクセス数が2000越えました！やったね♪しかも、コメディーのランキングで20位を切りました。これも読んでくださる皆様のおかげです！ありがとうございますm(_____)m これからも頑張っていきますよ！出来るなら応援お願いします。

評価・感想をいただければ幸いですm(_____)m

【2007／05／07】

8th Day: 僕と彼女のちょっと長い1日 そのさん

「さあ、休憩終わり！働くよ。」

香織さんの元気な声で休憩が終了する。桐子さんのカレー美味しかったなあ……………今度教えてもらおう。

「はい。」

私も声を出して立ち上がる。さあ、頑張ろう！今月はお小遣いが危なかったからなあ。丁度いい時に誘ってもらってよかったよ、うん……………まあ、困った時には葵に奢って貰えばいいんだけどね♪

「はあ……………」

葵が溜め息をつきながら立ち上がる。蒼眼で銀髪……………女の子みたいな私の幼馴染みは今日はエプロンドレスに身を包んでいる。うんうん、抜群に似合ってる！特にこの店の普通より短いスカートが気になるらしく、スカートの裾を引っ張りながらモジモジしている姿には私でも頬が赤くなる……………可愛いっ♪

「よし、やるか！」

「あれ、気合い入ってるね。この仕事気に入ったの？」

「んなわけあるか……………気合い入れないともたねえよ……………」
「そっか。」

残念、可愛いのに……。まあ私も頑張ろう。葵ほどは忙しくならないだろうけど……。確実に指名増えるから……。ふふっ♪

「葵。」

「何だよ……………」

これから、一番疲れるだろう葵に一声かけてあげよう。

「頑張って♪」

さあ、頑張ろう♪

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

夏澄も香織さんも席を立つのでしようがなく俺も立ち上がる。はあ、

休憩も終わるし行くか……………

「葵。」

夏澄が声をかけてきた。

「何だよ……………」

そう聞くと夏澄は一拍間をあけて言った。

「頑張って♪」

そう言った夏澄の顔は優しい笑顔だった……………正直効いた。うん、めっちゃめっちゃ可愛かった。

「はいはい。」

恥ずかしかったので素っ気なく返して部屋を出る。……………しょうがない、午後頑張ったのでやりますか！俺は半ば本気で気合いを入れて戦場へと向かったのだった……………

なんだこれわ……………

「おお！ やつと来たか三人とも。」

「桐子さん……………なんでこんなことになってんですか……………！」

店内の席は全てうまっている。この店は喫茶店とは思えないぐらい広いはずだが……………。しかも店の外にはかなりの人数が並んでいる。俺たちが休憩してた30分の間に何があったんだ……………？

「なに、看板娘の写真を入り口に貼っただけだ。」

「写真？」

「これだ。」

そう言って桐子さんは一枚の写真を懷から取り出した。

「……………桐子さん？」

それに写っていたのはこの店のメイド服を着た女の子。ベンチに横たわり眠っているようだ。着ているメイド服は少し乱れていて白い肌が覗いている。チラリズムか？そして気持ち良さそうに目を閉じている幼さの残る可愛らしい顔だちに長い銀のツインテールがよく似合っている。……………俺だよ（泣）！！！！

「いい写真だろう？ 葵が寝ている間に記念撮影したんだが、あまりに可愛かったんで有効活用しようと思ってな。」

なにしてくれてんだ！！！！

「さあ、指名が溜まってるぞ。しっかり働いてくれ！」

桐子さんはそう言って部屋の奥に引っ込んでしまった。おーい！ 任

せつきりかよ……………どうしろってんだ。

「葵ちゃん大人気ね〜！頑張ってね♪」

香織さん……………頑張ってね♪じゃなくて助けて……………

「フアイト♪」

夏澄もフアイト♪ぢゃねえよ……………

「葵ちゃん！こっち向いてくれ〜〜！」

「可愛い……………」

「こっちもだ！注文とってくれ〜！」

ぐっ……………ほとんどが俺指名じゃねーか！！！！

「ちきしょー！やってやらー！！！！」

俺は胸の中に激しい怒りを隠しつつ、とびっきりの笑顔で接客をはじめた。こうなったらこいつらの有り金搾り取ってやるぜ！！！！

「お待ちせしました！ご注文をお取りしますね♪」

「えっとね、この和風ハンバーグセットとオレンジジュースで。」

和風ハンバーグとオレンジジュース……………っと。この店、メイド喫茶のくせに料理はかなりまともだよ……………っと違う！最初のカモはこいつだ！

「あの……………御主人様……………」

「え、なに？」

「実はこの店自慢のパフェがあるんですけど……どうでしょうか？」

顎のあたりで指を合わせながら、上目使いで見つめる……決まったな。

「えっ……でも金無いしなあ……」

ちっ！こうなったら……

「そう……ですか……。ごめんなさい、ご迷惑をかけてしまって……」

俺は目を伏せながらしょんぼりする。

「あっ、いや、大丈夫！パフェも頼むよ……！」

……ふっ、落ちたな。後で何か言われんのも嫌だからサービスしとこ。

「あ、ありがとうございますっ♪……！」

俺は自分でも完璧だと思える笑顔でそう言った。……うん、完璧♪

「ではご注文を確認しますね♪和風ハンバーグがひとつ、オレンジジュースがひとつ、そして『LUCIFER』特製ジャンボパフェ（5人前）がひとつ、以上でよろしいでしょうか？」

「えっ……!!?」

「どうしましたか？（にこっ）」

「いや、なんでも……」

ふははははっ！あっさりひっかったぜ！ちなみに『LUCIFER』特製ジャンボパフェ（5人前）は3990円だ。俺の魅力にかればこんなもんだ……悲しくなってきた（泣）……そ、それでもやってやる！！！！

「お待たせしました！ご注文をお取りしますね♪」

こうして俺は営業時間ギリギリまで笑顔を駆使して接客を続けた……なんか、男として越えてはならない線を越えてしまった気がする……

「あー今日は楽しかったなあ♪」

家への帰り道、夏澄が言う。太陽は沈み始め、オレンジ色に辺りを染めている。

「楽しかった……か？」

「うん。」

俺は疲れたよ……楽しい要素が見当たらん……

「桐子さんが喜んでたよ、1週間分の売り上げが出たって。」
「そうか……………」

まあ、『LUCIFER』特製ジャンボパフェ×34個分の売り上げがあればね……………」

「また行こうね♪」

「絶対やだ。」

「ふっ、葵に拒否権は無いんだから。」

「なんでだよ。」

にっこり笑うと夏澄はポケットから紙切れを取り出した。

「これ、な〜んだ!」

そんなの分かりきってる。

「契約書だろ?」

今日こいつに付き合うハメになった忌々しい契約書だ。

「だから今日付き合ったんだろうが!」

そう言うのと夏澄はニヤリと笑ってとんでもない事を言い出した。

「どこに今日だけって書いてある?」

……………はい? 今なんて言った?

「どこにも今日だけなんて書いてないでしょ?」

いやいや！そんなこと言ったら一生有効じゃねえか！！

「アホか！一生言うこと聞かせる気かよ！？」

「そうだけど？」

ちよっと待て（汗）！！！何勝手に俺の人生束縛してんの！！？

「もう、しょうがないなあ。」

そう言っただ澄は俺の目の前に立つ。………しょうがないじゃねえ
つての！

「じゃあ付き合ってくれる度にご褒美あげる♪」

ご褒美？なんだそりゃ。

「目………瞑って………」

「………へっ！？」

えっと………それってつまり………？いや、ちよっと、まだ心の準備とかいろいろ………って若干上目遣いだし、めっちゃくちゃ可愛いし………って違う！！！！

「………嫌？」

「………わかった。」

目を閉じる。目の前にあった夏澄の顔が視界から消え、代わりに真っ黒な闇が広がる。待つこと10秒……20秒………30秒………あれ？

「…………夏澄？」

「ていっ♪」

「あたっ!!?」

おでこに強い衝撃を感じて目を開ける。…………半端無く痛い。

「てめえ何すんだ！」

「でこぴん。」

「んなこた分かってるよ！」

「まったく、何しやがる！」

「ねえ葵？」

「なんだよ……………」

「期待した？」

「う、うるせー！」

「そりゃ、期待したっての！」

「そうかそうか。」

「何だか満足げな夏澄。俺はうるせーって言ったんだけど？」

「さてと、家にも着いたしさよならだね。」

「そうこうしてる内に我が家に着いてしまった。」

「まったく、じゃあまた明日な。」

別れを告げて家に入る——その時

「葵！」

「なん……だ！?!？」

振り向こうとしたら頬に柔らかい感触。目の前には夏澄の顔。

「ごほうび♪」

「~~~~っ／／／」

は、恥ずかしい……!!!!

「じゃあね、バイバイ♪」

そう言って隣の玄関に駆け込んだ夏澄の顔が赤かったのは夕陽のせいか……そんなわけ無いか……／／／

こうしてちよと長い1日は終わりを告げた。いろいろあったけど終わり良ければ全てよし……かな？ただ、唇じゃなくて頬だったのがちよつと残念だが、まあ良しとしよう——

「あ・お・い〜♪」

「ふ、冬姉っ!？」

玄関からニヤニヤしながら冬姉が見ている。

「見たわよ〜♪」

「な、何を？」

「ふふふふっ♪」

冬姉は手に持ったデジカメをチラつかせる……やっぱりただでは

終わらなさそうだ……

8th Day: 僕と彼女のちょっと長い1日 そのさん(後書き)

どうも！皆さんお久しぶりです！梅雨になると気が滅入るぺたです。
……はい、ごめんなさい……長い間放置してました。読んで下さった方には本当に申し訳ないですm(_____)m つ、次こそは早めにUP出来るように……(汗)

さてと、今回の話で僕と彼女の長い1日は終了です(やっと)。次回は恐らく一話完結です。恐らく。気分屋なのでまた長くなるかも……f(_____)h； 期待せずにお待ちください。

最後に、ここまで読んで下さった読者様に感謝を。評価・感想をいただけたら幸いです。

【2007／06／15】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6317b/>

でいあ まい わんだふるでいず！

2010年10月27日14時13分発行